

「環境先進国ドイツ」とは：ヴッパータール市を事例に

What is the “Environmentally advanced Country: Germany”?
～ The case studies from Wuppertal

吉本祥子 Sachiko YOSHIMOTO

グローバリゼーションの下、環境問題はかつての限られた地域における〈被害－加害〉といった二項対立の形態から地球規模での環境問題へとスケールを拡大させ、様々に議論が展開されている。今日の資本主義経済システムにおいて、こうした環境問題に関する国際的な取り決めは権力諸関係にかかわるものであり、それは時として科学の客観性に依拠するところが大きい。

そして現行の経済システムに即した形の現実的な提案として〈持続可能な発展〉の概念が近年定着しつつある。この概念は、今日 CSR（企業の社会的責任）の中心的役割を果たしており、経済と環境問題のつながりを強化させている。

ドイツ連邦共和国（以下ドイツ）は「環境先進国」という地位を獲得し、その取り組みは世界的に高く評価されている。しかし、「環境先進国」という言説とその国際的な評価は妥当であるのだろうか。また妥当であるとするならば、それは何に依拠しているのだろうか。本研究はこうした関心から「環境先進国ドイツ」という言説を考察するものである。

ドイツではルール工業地帯における煤煙による大気汚染と、酸性雨による木々の枯死によって環境に対する意識が1960年代後半以降に高揚した。経済が低迷し失業問題も抱えていたドイツにとって、重工業から新興のエコロジー産業やエネルギー産業への移行といった産業構造の変革による「環境政策」は、環境破壊の改善だけでなく新規雇用の増大と経済成長をも同時に促進することのできる国家戦略として都合のよいものだった。

本研究で事例として取り上げたヴッパータール市は、ドイツで最も経済的影響力を持つノルトラインヴェストファーレン州に属しており、同州の他の中堅都市と同様、環境破壊と産業構造の変革を経験している都市である。筆者は現地にて5人の市民に対して環境問題に対する考えや思想、自然観、環境に配慮した日常の実践の現状、そして環境政策に関する聞き取り調査を行った。その結果、国家が彼らにむけるイデオロギーは改変され、

彼らの日常はそのイデオロギーとは大きく異なっていることが読み取れた。森へバイクでツーリングに行く、環境に負荷を与えると分かっているながらも瓶やペットボトルのデポジット制度による掛け金のリターンのため空き瓶を600km運ばせる、原子力発電に対する意見が大きく異なっていることなどである。すなわち、ベックの言う〈個人化〉という概念で示される、個々人のライフスタイルの多様化とそれによる個人の意思決定の幅の拡大が、今日彼らの環境に対する実践にも見られている。しかし同時に、「森へ散歩に行く習慣」あるいは「精神的な癒しの場としての森の存在」など伝統的な自然観や森林に対する愛着が、互いにコミュニケーションできる〈共〉性として受け継がれていることも本研究の聞き取り調査で確認することができた。この〈個人化〉と〈共〉性が、彼らの行動基準と思考に二面性をもたらしているということが考えられる。

CSRの概念が先進諸国で拡大傾向にある今日、環境問題というテーマが経済における戦略として新たに重要視されている。ドイツは経済構造の中に環境イデオロギーを組み入れ「環境先進国」という国家言説を創り出したが、こうした新しい社会的潮流がオルタナティブな思想あるいはイデオロギーとして、今後の社会構造に働きかけ人々の環境問題への関心に連続性をもたせる役割を果たしていくと思われる。